

村上春樹訳 「待ち伏せ」(タイム・オブライエン) を読む

——教科書のなかのベトナム戦争

野 中 潤

一、男が死のうとしている？

筑摩書房の『精選国語総合』に掲載されているタイム・オブライエンの「待ち伏せ」(村上春樹訳)に、次のような不思議な場面がある。

手榴弾は一度跳ねて、それから道の上をごろごろと転がった。私にはその音は聞こえなかった。しかし音はしたのに違いない。というのはその若者は武器を下に落として、駆け出したから。さっと素早く二歩か三歩、しかし彼はそこで躊躇した。右の方をくると向いて、そこに落ちている手榴弾をちらつと見下ろし、頭をカヴァーしようとした。でもしなかった。そのとき私はふと思った、この男は今死のうとしているんだ、と。私は彼に警告を与えたかった。手榴弾はぼんと爆ぜるような音を立てた。

ベトナム戦争に従軍していた「私」が、夜通し敵を待ち伏せて見張りをしていた時に目の前にベトナム兵の若者が現れ、条件反射的に手榴弾を投げたという場面である。いったいこの若者(ベトナム兵)は、なぜ危険を回避することを放棄してしまったのだろうか。また、いったんは駆け出したのになぜ立ち止まってしまったのだろうか。さらに言えば、手榴弾を見下ろして頭をカヴァーしようとしたにもかかわらず、なぜやめてしまったのだろうか。

二、「語り直し」と並行世界

「待ち伏せ」は、一人称小説であり、回想場面を中心に展開されるため、「現在」の「私」と「過去」の「私」の隔たりが叙述全体に不確定な感じをもたらしている。のみならず、

「過去」の「私」の体験そのものも、言わば「生理的な私」と「心理的な私」に分裂しているようなところがある。つまり、ジャングルの暑さや蚊の存在、そして胃の感触などの生理的な身体による体験の生々しさに比して、手榴弾のピンを抜いた瞬間の心理は、「憎んでいたわけではなかった」とか「敵として考えていたわけではなかった」などの「見せ消ち」の連鎖によって不安定で現実感のないものとして追想されているのだ。戦争という極限状況の中で体験であつただけに、「過去」の「私」の心理は、追体験しにくいものとして感受されている印象だ。まるで夢であるかのような戦場体験の不確かさと、時間を隔てて回想することによって生じる「あれは本当の出来事だったのだろうか」という不確かさが、それぞれ異なる位相から叙述全体に不確かさをもたらし、戦争で人を殺してしまった「私」の心理の不確かさとして読者に感受されるといふ仕組みになっているのである。

ある。だが、作中では「記憶している」「覚えている」という表現が繰り返され、また「実際に起った」とを、あるいは私の記憶している起ったことを(傍点——引用者。以下同)「私は彼が怖かった——というか何かが怖かった」という言い換え表現に見られるように、戦争の記憶を物語る(想起——叙述する)際の、語り手「私」の正確な記憶の再現への意志が「見せ消し」のように痕跡として残されている。

「待ち伏せ」で語られる出来事を中心は、今も「私」を苛んでいるヴェトナム戦争での殺人という、極限状況における経験で

「待ち伏せ」では「私」の感情や身体感覚を中心に描き、若い男についてはごく簡潔に、あるいは最後に「私」の想像の産物と

して出てくるにとどめてある。対して「私が殺した男」では、若い男の死体を観察した様子と、その身体的特徴から連想される若い男の生い立ちの物語を中心に据え、「私の感情表現は一切抜きにして語っている。視点は異なるものの、どちらも（リアル）に感じられるテキストなのだが、注意しておきたいのは、この語り直しによつて、若者の殺したエピソードはどちらが「本当」なのか、読み手に混乱をきたしかねないということだ。

タイム・オブライエンという固有名があることは「待ち伏せ」がベトナム戦争での戦闘体験を持つ作家による小説であることを意味しており、そのことによつて小説世界の「リアル」が読者にもたらされる。しかし、同一であるはずの出来事が語り直しによつて多重化されることで、一方では「リアル」の足場が揺らぎ出すのである。

「待ち伏せ」の中にも「語り直し」はある。「私は実際に起こったことを、あるいは私の記憶している起こったことを彼女にすっかり話してしまいたい。」という叙述の後に、まづ置かれているのは、次のようなパラグラフである。

彼は背の低い痩せた男だった。年は二十歳前後だった。私は彼が怖かった——というか何かが怖かった。そして彼

がその小道を歩いて私の前を横切ったときに、私は手榴弾を投げ、それは彼の足下で爆発し、彼を殺した。

ところが、この直後に「あるいは、もつと前から話そう。」という一文を挟み、若い男を殺すにいたる過程を「私」は詳述し始め、「語り直し」を行うのだ。

こうして「見せ消し」のような言い換えと、テキストを複数化する「語り直し」が、「記憶の並行世界」を生成していく。しかも、叙述自体の臙化によつて解釈が複数化していく部分があることも指摘しておくなければならない。

引用したパラグラフの結びに「彼を殺した」とあるが、彼を殺したのは「手榴弾」なのだろうか、それとも「私」なのだろうか。英文でも、“I threw a grenade that exploded at his feet and killed him.”となつていて、killed himというフレーズが主語との関係を明確にすることを回避しているようにも見える。つまり、「私」の意志で殺したという現実を臙化するために、「それ」すなわち「手榴弾」が「彼を殺した」という文脈を前景化しているようにも見える。しかも、読点で挟まれた「それは彼の足下で爆発し」が後景に退けば、「私は手榴弾を投げ、彼を殺した」という文脈が浮かび上がってくるのである。

ここで、若い男を殺す冒頭の不思議な場面に戻れば、同じ場面の詳細な語り直しの中にある以下のような叙述にも、臆化と複数化を読み取ることができる。

そのとき私はふと思った、この男は今死のうとしているんだ、と。

「この男は今死のうとしているんだ」という日本語には、解釈の可能性が二つある。一つは、「この男は（客観的な状況として、本人が気づいているかどうかはともかく）今まさに命を奪われて死を迎えようとしている（ということに私は気づいた）のだ」という解釈である。もう一つは、「この男は（なぜそうしたいのかはわからないが）今まさに自らの意志で死を選び取ろうとしている（ということに私は気づいた）のだ」という解釈である。最初の解釈は、自分では十分に自覚できないまま、条件反射的に手榴弾を投げてしまった私が、自分が投げた手榴弾で人が死んでしまうという現実を、手榴弾を投げてしまった後でふと気づいたという含意を、前後の描写から読み取ったものだと言える。「私は彼に警告を与えたかった」というのも、男が手榴弾の危険性に気づいていないということ为前提にした表現だと考えられる。一方、二つ

目の解釈は、落ちている手榴弾をちらっと見下ろして頭をかばおうとしたにもかかわらずやめてしまったという男の動作の意味を推測することから導き出される。この若者はベトナム戦争においてきつと過酷な体験を重ねてきたはずで、そういう体験をもうこれ以上は受け止めきれないと感じ、こんなに苦しい思いをするくらいならいつそのこともう死んでしまいたいという気持ちを抱えていた。そのために、転がってきた手榴弾を見た瞬間、これ幸いとばかりに自ら死を選び取ろうとしたのだという類いの解釈である。

三、「彼」の不可解な行動をめぐって

村上春樹が「そのとき私はふと思った、この男は今死のうとしているんだ、と。」と訳した部分は、原作では以下のような英文でつづられている。

It occurred to me then that he was about to die.

“It occurred to me then that he was going to die.”との違いを意識して訳すと、以下のような含意になる。

そのとき私はふと、彼が今まさに死の瞬間を迎えつつあ

るのだ、ということに気づいた。

英文の解釈は、“It occurred to me then that he wanted to die.”や“It occurred to me then that he hoped to die.”などの表現との比較の中で推し量られることになるわけだが、どうやら原文においては、村上春樹訳のような不確かさは回避されていて、一つ目の解釈、すなわち「この男は今まさに命を奪われて死を迎えようとしているのだ」という解釈が穏当だと言えそうだ。彼は死にたがっていたわけではないということ、つまりは自殺願望があったということではないということである。

しかし、もしそうだとしても、「頭をカヴァーしようとした。でもしなかった」のはいったいなぜなのだろうか。

まず考えられるのは、「私は実際に起こったことを、あるいは私の記憶している起こったことを」語っているためであるということである。つまり、あまりにも非日常的な体験であるがゆえに、あるいは睡眠不足の状態を迎えた朝霧の中の出来事であるがゆえに、事実誤認を起しているということだ。「私」の記憶そのものに錯誤があつて、そのために合理的に説明できない行動に見えているが、現実にはそのような行動はなかったか、あるいは、あつたとしても記憶とは異なる

合理的な行動であつたという可能性である。たとえば、「彼」が気づく前に、逃げる間もなく手榴弾が爆発したのかもしれないし、転がってきた手榴弾を見て後ろを振り返りながら逃げ出した「彼」が走りながら頭をカヴァーしようとした瞬間に手榴弾が爆発したのかもしれない。あるいは、そもそもこんな出来事は初めからなかったのかもしれない。

こうした解釈の可能性は、回想という形式によつて書かれたものを読む限りにおいて常に伏在している。それは、「待ち伏せ」がフィクションであるからという理由からではなく、フィクションをリアルな出来事として受け止めるという読書行為においても、原理的に排除することができない可能性としてある。ただし、「待ち伏せ」という小説の言語には、何かしら「私」が記憶し、回想していることに匹敵する現実的な出来事があつたと思わせる強度がある。言い換えれば、事実誤認であつたと考えてしまうと、「私」が娘に語ろうとしている戦争体験の意味が切り下げられ、この小説の価値が損なわれてしまうということだ。別の言い方をすれば、この出来事が全くの錯誤であることを示唆するようなフラグが、この小説中には見当たらないということである。

だとすれば、「頭をカヴァーしようとした。でもしなかった」のはいったいなぜか。

「私」が回想している世界が、現実的な因果律が支配する出来事によって構成されていると見なしながら読むとすれば、可能性は限られてくる。それは、手榴弾によって命を落としたり「彼」が、戦闘経験の未熟なベトナム兵なのではないかということである。そしてその未熟さが、手榴弾を投げられた兵士としては不自然で非合理的な行動を取らせたのではないかということである。この年若いベトナム兵は、次のように描写されている。

彼は黒服を着て、ゴムのサンダルを履いて、灰色の弾薬帯をかけていた。彼は僅かに猫背気味に歩いてた。首は、まるで何かに耳を澄ませているかのように、横に傾いていた。彼はくつろいでいるように見えた。彼は片手に武器を持っていた。銃口は下に向けられていた。とくに急ぐ様子もなく、彼は道の真ん中を歩いてた。

ベトナム兵がしている弾薬帯というのはおそらく、弾薬を収納するポケットがついた粗末な布製のベストである。また、黒い服やサンダル履きは、南ベトナムの武装共産ゲリラたち一般的な服装である。手にしている武器は、AK-47（一九四七年式カラシニコフ自動小銃）である可能性が高い。こ

うした外見は、いかにもゲリラ兵そのもので、「私」が条件反射的に手榴弾を投げてしまうのも無理もないことである。しかし気になるのは、この男が特に急ぐ様子もなく「道の真ん中を歩いてた」ということだ。常識的に考えて、戦場で兵士が単独行動をする場合、道の真ん中をゆっくり歩くということは考えにくい。道の真ん中を歩いていた場合、直線道路だったとすれば、数百メートル先からでも簡単に敵に見つけられてしまうからである。敵がどこに潜んでいるかわからない戦場において、それはただちに死の危険を意味する。しかも武器を片手で持っているというのも、いかにも緊張感に欠けたふるまいである。周囲を警戒して移動しようとすれば、道の両側の茂みにも神経を働かせつつ、いつでも射撃体勢に入ることができるように両手で銃を持っていた方がふさわしいように思える。少なくとも、あまり目立たないように道の端っこを歩いているべきだろう。そういう疑念を抱きながら手榴弾が転がった時の描写を改めて確認すると、さらに不可解な行動を取っていることがわかる。手榴弾が地面を跳ねて転がる音を聞いた瞬間に、「その若者は自分の武器を下に落として」しまうのである。十分な訓練を受けた兵士ならあり得ない行動ではないだろうか。武器が身体になじんでいない感じの銃の持ち方と言い、自分の身が危険にさらされようと

しているにも関わらず簡単に武器を手から離してしまうという行動と言い、どう見ても訓練を十分受けた兵士だとは思えない。たとえば、死体から略奪したギリラ兵の装備を見よう見まねで身に付けてはみたものの、自分の身が危険にさらされる「すみません。私は兵士ではないのです」と言つてあっさり武器を捨ててしまう農民のような感じであると言つたら憶測が過ぎるだろうか。しかし、そのような想定のもとに「頭をカヴァーしようとした」という不可思議な場面を読み直してみると、整合性のある読みの可能性が浮上してくる。

すなわち以下のような出来事と心理と行動の連鎖である。自分の近くで物音がする。びっくりして武器を落とし駆け出す。銃声や爆発音ではないと気づき立ち止まる。振り向いて物音がしたあたりを見る。手榴弾に気づき驚く。爆発しないことを不思議に思う。ほんとうに手榴弾なのかと疑問を抱く。戸惑いを覚えながら転がっている物体をあらためて見つめる。その瞬間、手榴弾が爆発する。

どう考えても、非合理的で馬鹿げた反応である。しかし、死の危険が迫っているにもかかわらず、特別なことが起こっているわけではなく自分は大丈夫だと考えてしまう「正常性バイアス」のような心理が働いていたと考えれば、あり得ない反応ではない。ましてや経験の浅い未熟な兵士であればな

おさらである。そしてこのようにして「その若者」の兵士としての熟練度に疑念を持つことは、「私」の兵士としての熟練度への疑念をも招き寄せる。

手榴弾はぼんと爆ぜるような音を立てた。ソフトな音ではないが、かといって大きな音でもない。それは私が予想した音とは違っていた。土ぼこりが舞い、煙も出た。小さな白い吹き出しのような煙だった。

「白い吹き出しのような」という直喩を使った煙の描写からは、どこか現実感の稀薄な印象が感じられる。その一方で、「私」が手榴弾の音に驚いていることから、実戦経験が稀薄である可能性が指摘できる。もちろん最低限の訓練は受けているはずなので、手榴弾で安全ピンを抜いて投げる動作の練習はしただろう。しかしその際には、爆発する恐れのない訓練用の手榴弾を使っているはずである。つまり「私」は、このとき初めて本物の手榴弾を投げた可能性があるのだ。

そんなふうに考えると、本物の手榴弾を投げたことがないような乏しい実戦経験しか持たない「私」が、にわか兵士のような行動しか取れない、戦闘能力に乏しいベトナムの青年に対して過剰防衛とも言える行動を起こしてしまったという

話として回想されていることになる。「私」が経験豊富な兵士であれば、武器を片手に道の真ん中を歩く青年が訓練を受けた兵士ではないことを見抜き、無益な殺人を犯さずに目の前の現実に対応できたかもしれないのだ。だとすれば、「私」を苦しめているのは、殺す必要などまったくなかったのかもしれないという自覚の浮上である。はつきりと自覚されているわけではない自覚が、無意識下から浮上してぼんやりとした形を取りつつあるということかもしれない。言い換えればそれは、自分が未熟であつたがゆえに、殺さなくてもよい青年を殺してしまったのかもしれないという罪障感なのだ。

四、教室で読むベトナム戦争

「待ち伏せ」が収められた短編集『本当の戦争の話をしよう』には、前述したように、「私が殺した男」「グッド・フォーム」など、同じ出来事をモチーフにしている小説が他にも収められている。それらの小説に描かれている「彼」は、筋肉の少ない華奢な体つきで、自ら進んで兵士になったとは思えない学究タイプの青年である。戦争や武器や暴力についての知識やスキルに乏しく、戦闘意欲に乏しく、兵士としてはあまりにも無防備で迂闊に見える若者が戦場に身を置き、同じく戦闘経験が豊かではない若者によってあっさりと命を奪

われてしまう戦争の現実がそこには描かれている。短編集の中で読めば、そういう若者が時を経て、「お父さんは人を殺したことがあるのか」と尋ねてきた娘に対して、「まさか、殺してなんかいないよ」と答えているという話になるのだ。

ここまで、原文をも参照しながら「待ち伏せ」という教材に向き合ってきたわけだが、英語科とのクロスカリキュラムを想定すれば、高校生にもこうした読解は可能だ。また、文学や映画においてベトナム戦争がどのように表象されてきたのかとか、そもそもベトナム戦争とはどのような戦争であつたのかといった問題への展開も可能である。こうした問題を考えるための手がかりは、先行研究のPDFファイルを含め、高校生でも参照可能な場所に豊富に準備されているからだ。「待ち伏せ」という教材の可能性は、教科書のとと、あるいは学校のそとの世界と生徒たちを切り結ぶことによつて、読むという営為の豊饒性を体験させてくれるところにある。

(1) 宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九九〇年代』(おうふう、二〇一二年六月)

(2) 馬場重行・佐野正俊編『《教室》の中の村上春樹』(ひつじ書房、二〇一一年八月)

(のなか・じゅん)